

【原本】FAIクラブの株式投資法

FAI VOL.2
林 輝太郎

はじめに

多くの個人投資家が「低位株投資」を口にするが、明確な定義をスラスタと言える人はめったにいない。だから、実際の売買行動もあいまいで、“行き当たりばったり”なものになりやすい。

東京証券取引所に上場されている個別株は約3,500銘柄、最上位の東証一部に限っても2,000銘柄に届こうかという状況だ（2016年5月現在）。その数は年々、増加しているし、業種や業態は幅広いばかりか、個々の企業において変化をみせる。

そんな状況下、軽いノリで「低位株投資だ」と行動に移しても、信念のあるポジションをつくるのは難しい。不安を抱えたままの船出になってしまうのだ。その不安は極めて正しく、いわゆる「芯」がないために対応が不適切になる。全体のバランスが整っていないので、真実さが生んだ個人の強みまで打ち消してしまう。

低PER、低PBR、配当利回り、等々、いわゆる「割高」「割安」を計る尺度は数多くある。より専門的な分析もあるし、複数の観点を組み合わせれば無限に広がり得る。

だが、真に割安な銘柄を見つける簡単な方法などあるわけがない。すぐに機能する方法があるのなら、そもそも割安に“放置”されている銘柄など存在しないからだ。

結局は、数字で示すことのできない「市場における人気」によって株価が変動している、という事実に向けるしかない。不特定多数の個人や企業、プロ投資家が動かすファンドなどがひとつの土俵で

“カネの奪い合い”を繰り返すのが株式市場という場である。背景にある経済状況や個別企業の業績変化などを踏まえ、最終的に株価に反映される人気の変化を捉えるのは至難の業といえる。

よって、市場参加者はプロを含めて一様に、迷いながら行動している。ここに、個人投資家の勝機がある。市場は効率的といわれながらも、とにかく規模が大きい。参加者は、純粋な値上がり益を狙う者だけではない。値下がりを狙うカラ売り筋がいたり、上場企業そのものの特殊な論理による売り買いもあったり、すき間が生じる余地が意外とあるのだ。個人投資家が動かす金額は数十万から数百万、数千万円、多くても数億円だ。それを、東証一部だけの時価総額で約500兆円という規模の株式市場で動かし、年に1割、2割くらいの利益はもちろん、短期間で2倍、3倍にしたとしても、勝機を与えてくれるすき間が埋まってしまうことはないだろう。

なによりも個人投資家には、大いなる「自由」がある。手がける銘柄も、具体的な売買手法も、好きなように決めることができるのだ。しかし多くの人が、休みなく売買したり、ムリに資金を膨らませて過度なリスクを取るなど、「あえて難しい方法を選択している」と、業界内部の人間ならば誰もが指摘する。つまり、勝つためには、休むも攻めるも自由だという個人投資家の特権を最大限に利用することが肝心なのである。

難しい知識を持つ必要はない。特殊な技術もいらない。単純な着眼点を単純に守ることで数ある情報を整理し、自分の売買を単純かつコントロールが容易なものにしておくだけでいいのだ。

そんな個人投資家ならではの“戦い方”を、一本筋の通った手法としてまとめたのが、本書に掲載されているF A I投資法だ。

専門的な知識を要求されない、誰にでも実行可能な優良低位株の見つけ方、安全を確保しつつ効率を求める個人投資家の取り組み方が、このF A I投資法なのである。

この方法を知った私の父、林輝太郎は1984年、この手法を研究・実践する団体として「F A Iクラブ」を発足させた。バブル期の株価底上げの中で利益をあげ、単純な着眼点を守ることで90年以降の下げでも損失を出さなかった。そして、発足から30年以上が経過した現在も、変わらずに活動を続けている。

時代の流れとともに環境も変わりつつあるが、経験豊富な輝太郎が確信したのは、F A I投資法の普遍性であり、なによりも、誰でも実行でき、経験を積むほどに技術を向上させていくことのできる、手法としての実用性だったはずだ。

成果をあげるためには、個人の力量が求められるうえに、その力量を備えるための努力が不可欠だ。しかし本書は、「低位株とは何か」「低位株投資はどうあるべきか」を明確にしている点で、個人投資家として進むべき方向を示す指南書として完成度が高い。読者それぞれが、自らの経験と照らし合わせながら、自立したプレーヤーとして売買活動の質を高めるべく、真剣に読んでほしい。

2016年9月 林知之

目次

【原本】 F A I クラブの株式投資法 VOL. 2

はじめに.....	1
-----------	---

第 1 章 | 相場の「ひと区切り」

1. 3段上げの値幅の統計	10
1. 困難度ということ	10
2. 次第にバラツキが大きくなる.....	13
3. 安全と効率を考える	18
2. 上げ月数の統計	22
1. 月数がわかりやすい	22
2. 低位株上昇日柄の調査	26
3. 1段、2段の上げ	28
4. 3段上げの典型	31

第 2 章 | 銘柄の維持 ルール17~20、27~30

1. 1段上げ	38
---------------	----

1.	効率の良さ	38
2.	的中率の高さ	40
3.	1段上げの「やさしさ」	44
2.	利食いと買い直し	48
1.	60日波動の月足	48
2.	小さい波動の月足	52
3.	やさしさと効率	59
3.	中段の揉み	62
1.	集合形	63
2.	集合形の分類	64
3.	ルール19は保留	68
4.	整理の型	71
5.	1段上げの値幅	73
6.	1段上げ後の保合い末期	74
4.	ケイ線による利食い	75
1.	半値押し	78
2.	ケイ線論は公約数的	79
3.	影と実体	82
4.	半値押しの確率は30%	85
5.	半分食い込みと両抜き	87
5.	2段、3段への上伸	89
1.	2段上げまで取る	89
2.	似ている9銘柄の調査	93
6.	上昇途上の売買	100

第3章 | 利食い ルール30

1. 3段上げ	104
1. 「利食い」について	107
2. 利食いして損することはない	108
2. 持続期間について	123
1. 永久に売れない「考え方」	125
2. 生まれてはじめての売買	127
3. 低い成功率	151
1. 上達を阻むもの	155
2. 独学の弊害	156
3. 大儲けの誘惑	157
4. 損失率は50%か？	158
5. F A Iの利益率は高い	159
6. 区切りをつけよ	161

第4章 | カラ売り

1. 循環天井	168
2. カラ売りは必須ではない	172
3. カラ売りは心理的な違和感を伴う	176
1. 特殊な取引だという先入観が邪魔をする	176
2. 下値がわかっていることからくる圧迫感	176
3. 買うことになれていて、売ることになれていない	178

4.	期限の心理的負担	180
1.	6カ月という期限があるので、焦燥感にかられる	180
2.	逆張りで売りにくく、順張りになりやすい	181
5.	有利な「乗り替え」の活用	183
6.	短い期間と大きな値幅	188
1.	天井のかたまりは短期間で値幅大	188
2.	下げはじめから大幅である	189
7.	3分割が効果をあげる	191
8.	必ず取れる	192
9.	F A I クラブのカラ売り	198
1.	銘柄の限定	198
2.	カラ売りの方法	202

第5章 | F A I クラブについて

1.	投資家といわれる人々	206
2.	30項目のルール一覧	210
3.	その他10項目の解説	214
1.	異常に長い上ヒゲと下ヒゲ～その他①②	214
2.	赤三兵は買い～その他③	215
3.	純資産倍率の低いものは買い～その他④	215
4.	逆三角形で上がるときあり注意～その他⑤	216
5.	外人買い～その他⑥	216
6.	兆し陽線の出来高急増～その他⑦	217

7.	株価収益率～その⑧	217
8.	兆し陽線あとの押しの次の大きな陽線～その⑨	218
9.	3段下げ末期の陰線本数より陽線本数が多く、 出来高が減少しないとき～その⑩	218
4.	最も重要なのは個人の売買技法	219
5.	集団の研鑽	220
6.	個人の研鑽	225
7.	相互研鑽の相乗効果	229

第6章 | F A I 投資の上達法

1.	証券会社	232
1.	蹴っ飛ばされないこと	232
2.	すべては自己責任	237
3.	F A I の売買は歓迎されない	241
2.	勉強と努力	245
1.	良い売買法とは	245
2.	作業が必要	249
3.	努力が花咲く	252
3.	高値波乱の時期の波乗り売買について	256
4.	株式投資の姿勢について	261
1.	個人投資家の不利なところ	261
2.	自分で危機をまねく	265
3.	作業を中断せずに	269

第1章 | 相場の「ひと区切り」

1 ■ 3段上げの値幅の統計

1. 困難度ということ

買った銘柄は、ある程度の期間、上げの動きに乗って、高値まで維持して（持ち続けて）売却する。これで、いわゆる「ひと区切り」となる。

グラフをみると、最高値で売りたいくなるが、これは不可能である。VOL.1で解説したグラフ（272～273ページ）でも、8826角栄建設の天井（大引で655円、ザラバで672円）、9123太平洋海運の天井（大引で570円、ザラバで581円）で売ること考えてみればよい。

コンピュータの専門家がとった統計で、

- ・天井の1点で売れる確率 1500万分の1
- ・天井から2%以内で売れる確率
(天井をつける前とつけたあとの両方) 10万分の1
- ・天井から10%以内で売れる確率(同) 30分の1

という数字があるが（これは大天井における統計）、まさに天井で売ることの困難さを示している。

また、困難という点については、プロの間でいわれている難易度（この場合は“難度”ということになるが）については、

1段上げの玉の維持を1

とすると、

2段上げの玉の維持は3

の難度があるといわれる。もちろんこれは、実践者の上手下手にかかわらず、1段上げの3倍の精神的および技術的困難さがあるということだ。さらに、

3段上げの玉の維持は9

と、級数的に難度が増すといわれているが、たしかにこれくらいの困難さがあるとうなずけるであろう。

前に例を出したAさんの太平洋海運の見事な売買でも、4回の繰り返し売買で現実にとったのは3段上げの途中までであることをみても、3段上げを取ることの困難さがよくわかる。

もちろん、3段上げまで取ろうという意欲は大切ではあるが、大変な困難さと危険をとまなうものであるから、無理に取る必要はない、という意見がある。

これは、上手な人やプロの間でもいわれていることなのである。

これには2つの内容がある。

①期間的な効率の問題

②失敗の可能性（上記の困難度）の問題

である。

期間については、たとえば、

① 1段上げ3カ月

2段上げに移るまで6カ月の保合い

② 2段上げ3カ月

3段上げに移るまで6カ月の保合い

③ 3段上げ3カ月

と、上げの期間をそれぞれ3カ月ずつ、途中の保合いを6カ月ずつとすると、1年9カ月の間、買い玉を維持しなければならないことになる（後で例示する）。

角栄建設のグラフをみても上げの期間は1年10カ月で、ちょうど上記の計算と一致するが、この2年近くの期間、買い玉を維持して果たして効率はどうかであろうか。

仮に3段上げまで維持し、ある程度の成果（天井で売れなかったとしても）をおさめたとしても、期間的にみれば効率はあまりよくないはずだ。

精神的な満足感は大いにあるかもしれないが、その満足感は、いわゆる“当て屋”としての満足感で、上手な人やプロの仕事としてのものとは少し別のものといわなければならない。

また、常に3段の上げがあるとはかぎらず、次に述べる難度とあわせて考えると、買い玉の維持は、効率という面を大いに考慮する必要があることがわかる。

次に、難度について述べる。

これは、下手な人にはむずかしい、ということではない。

上手下手にかかわらず、1 - 3 - 9 という苦痛がともなうのであるから、3 段上げまで玉を維持していくのは合計13になる。これは、1 段上げを取る難度の13倍ということになる。

あとからみるとやさしいし、「ここで1 段、ここまですで2 段、ほら、ここで3 段上げ」などと簡単に言えるが、いざその場に直面するとどうなるか。

こういうことを考えると、13分の1のやさしさの1 段上げばかりを取っていたほうが楽で儲かる、ということにもなる。

事実、10億円を達成したS氏はそうであった。もちろん、繰り返し売買をしていく銘柄はあったが、多いときで4 銘柄、少ないときは0 であり、1 段上げを「十分に取る」ことを主体にしていたことがわかる。

それは、「仕事としての堅さを持っている」と表現するとよく理解できるだろう。

2. 次第にバラツキが大きくなる

次のような数字がある。

統計は2 つ。ひとつは、1 段、2 段、3 段の上げ幅についてのもの。もうひとつは、1 段上げ、2 段上げ、3 段上げがきれいにあらわれた銘柄数である。

まず、1982～1984年の3 年間に選定された注意銘柄の132銘柄に

ついでのもので、統計としてはあまりよくできていないが、概略はよくわかる。

1982～1984年の132銘柄について、

1段上げ

50円以下	5
50～80円	22
80～120円	45
120～170円	51
170～230円	9
230円以上	2

50円以下は、選定に失敗した銘柄数とみてもよいが、注目しなければならないのは、

80～170円	96
---------	----

という数字であり、実に73%がこの範囲の中に入っているのだ。

上昇率の調査がないのが残念だ。たとえば200円の銘柄で150円の上げならば75%上げであるが、同じ150円の上げ幅でも300円からならば50%になる。

しかしこれは、

ルール18 1段上げは約100円幅。しかし、70～80円で利食い

で述べられていることと一致するものであるし、別の言葉で表現すれば「全く実践的である」ともいえよう。

注

上記 132 銘柄の上げ幅の分類は、1 段、2 段、3 段とも、上げの直前の安値から、それぞれの（たとえば 1 段上げならば 1 段上げの）天井までの上げ幅である。

よって、次に述べる 2 段上げ、3 段上げでも、もし、同一銘柄で、1 段、2 段 3 段の上げ幅を加算すれば、3 段上げの幅より大きくなる。

たとえば、

1 段上げ 120 円幅

30 円押し

2 段上げ 200 円幅

50 円押し

3 段上げ 200 円幅

ならば、3 段上げの合計幅は 520 円-80 円で 440 円幅になるわけである。

次に、1 段上げた 127 銘柄（132 - 5）について、2 段上げの値幅がどうなったかの調査は次のようであった。

1 段目の高値を抜かなかったもの	6
50～80円	21
80～120円	12
120～170円	9
170～230円	48
230～300円	11
300～380円	15
380円以上	5

これは、ずいぶんバラツキが大きい。

しかし、1段目の80～170円が73%であったのに比べると、上げ幅が少し大きくなって、

80～230円	69	54%
---------	----	-----

になっている。またこの最多価格帯を拡大しても、その比率が小さくなっていることがわかる。

次に、3段目はどうなっているであろうか。銘柄数は127-6で121。

2段目の高値を抜かなかったもの	18
50～80円	11
80～120円	22
120～170円	12
170～230円	8
230～300円	8
300～380円	13
380～470円	8
470～570円	12
570円以上	9

これをみて、間違いではないかと思うのは、3段目の最多価格帯になるだろうと推定される170～300円が最少価格帯になっていることである。また、はっきりわかることは、2段目に比較してバラツキがなお大きくなっていることである。

それは、「上がらないか」「大きく上がるか」のどちらかが多く、常識的な中心価格帯が少ないことによる。

つまり、この1段、2段、3段を比較して、

1段目 最多価格帯 80～170円 73%

2段目 最多価格帯 80～230円 54%

3段目 最多価格帯 不明

ということになる。

これは、難度は1段目が1、2段目が3、3段目が9というのとあわせて考えると、3段目は、

- ・グラフの見方も困難であり
- ・出来高との相関性もなくなり
- ・人气的な動きで騰落が激しい

ということにもなる。

また、132銘柄（注意銘柄）のうち

1段上げのなかったもの 5

2段上げのなかったもの 6

3段上げのなかったもの 18

という数字をみてもわかる。

3. 安全と効率を考える

グラフを出さなくてもわかるから、4021日産化学の典型的な3段上げをみてみよう。

1 段

1982年 8 月	105円	
1983年 1 月	298円	193円幅

2 段

1983年 6 月	196円	
1984年 2 月	355円	159円幅

3 段

1984年 5 月	251円	
1985年 1 月	385円	134円幅

そして、高値更新の幅は、

1 段～2 段	57円幅
2 段～3 段	30円幅

と次第に小さくなっている。

一方、8826角栄建設を同じようにしてみる。

1 段

1984年 8 月	91円	
1984年11月	221円	130円幅

2段

1985年 1月 170円

1986年 1月 523円 353円幅

3段

1986年 2月 386円

1986年 6月 672円 286円幅

と同じようであり、高値更新値幅は、

1段～2段 302円幅

2段～3段 149円幅

と、やはり、4021日産化学と同じように、3段上げの幅は小さく、高値更新値幅も小さい。

一般の投資家の持っている常識(?)に合うのは、4404ミヨシ油脂である。

1段

1984年 9月 220円

1985年 1月 355円 135円幅

2段

1985年 7月 268円

1986年 2月 480円 212円幅

3段

1986年 3月 379円

1986年 7月 655円 276円幅

ミヨシ油脂の場合は135円、212円、276円と、上げ幅が次第に大きくなり、また高値更新の幅も、

1 段～2 段125円

2 段～3 段175円

と大きくなっている。3 段目で人気化し、大幅な上げと高値更新をみせているのがわかる。これが、一般投資家が3 段上げを取ろうと夢にみている計算なのである。

しかし、これまでくどいほど実証してきたように、3 段上げは取らないほうがよい。

3 段上げは「売るためにある」と考えるべきである。1986年は建設株が大きく動いた年であったが、1975朝日工業社でも、3 段上げの値幅は大きいが高値更新の値幅はごくわずかで、次のようになっている。

1 段

1984年 9 月 270円

1985年 1 月 409円 139円幅

2 段

1985年11月 325円

1986年 6 月 759円 434円幅

3 段

1986年 9 月 392円

1986年12 月 795円 403円幅

ちょっとみると、3段上げも相当に大幅のようにみえるが、2段上げのあとの押しが大きく（367円幅）、3段上げの高値は2段上げの高値をわずか36円しか更新していない。

以上のことをまとめてみる。注意銘柄に選定したなかで、

① 3段上げのなかったもの 18 (14.9%)

すなわち、2段上げをしながら、3段上げのなかったものが15%弱もあるということで、実質的に3段上げ期待をしないほうがよい、ということにもなる。

② 3段上げは、上げ幅においては最多価格帯がない。強いていえば、上げ幅の小さいものが多い

すなわち、あまり上がらないか、大きく上がるかのどちらかが多く、これを見極める決め手はなく、たしかに難度は「9」というのもうなずけることである。

③ 難易度のことをあわせて考えると、2段上げまでを確実に取ったほうがよい

これは本文中で説明したが、3段上げを取ることの困難さは、「もし失敗したら」ということを考えると、いわゆる「深追いはしない」のが安全であり、それは成功するための大事な要件のひとつであることもわかる。